

# 仏陀のことば

夫や道を学ぶ者は、なお水中の木の流れを尋ねて行くが如し。  
兩岸にかれず、人のために取られず、亦腐敗せぬは、  
われ、この木決定とく海に入るべとを保せん。

学道の人、欲情のために惑わされず、衆邪のたぬに乱されず、  
精進無為なれば、われ、この人必ず得道するべとを保せん。

目 次

鷲峰三号

祖訓

現実をみつめて

第三回 身延山行脚 長野中信地区長開

創価学会折伏街頭布教

その反響

あるべき姿の改め

鷲峰会第一回パワスター

講義テキストより

後記

以 上

14 13

10 3

2



祖訓

夫は國は法に依つて昌之、法は人へ國を貴し。國セシム佛を誰が崇むべき、法を誰が信すべき。先づ國家を祈りく須らく仏法を立つべし。

立正安國論

世間には法華經を読むに、口ばかり、詞ばかりは讀むとも、心に讀まず。心に讀めど身に讀  
下。貴近は身と心にて讀めだまえ。父母並に一切衆生を助けたまうべき御身なり。

火の如く信ずる人あり、或は水の如く信する人あり、火の如くと申すは聽聞する時は、もと火  
つばかりと思ひども、遠ざかりぬれば捨つる心あり。水の如くと申すは、何時も信する者なし  
水の如く信してせ給うべ事し。

## 現実をせつめく

「過去は追わざれ、未来は願わせれ、凡そ過ぎ去ったものは既に消え、未来のものは未だ現れず、現在するものはまだ現在、現象のまゝ。故に各人、各々の所に於いて、現実をよく觀察し、様なく、動下さなく、ただ、今日只今何はすべき事を熱心になせ、誰か、明日の死あるを知らんや。』と歌つたのは印度の偉大なる仏教の祖釋迦である。『未來の時に田代聰子が、刹那を捉えよ、然るて天地は汝のものとするべと云つたのは、ドーリーの大詩人シラしだつた。

現実を在るがまことに正しく直視せよ、過去の思ひや、未來の思ひを退へて、現実を見誤るな。人生の実相はターナンとしている。……雲はぬき水は流れれる……カラスはフカアーレンヨキ、猫はヤンヒナ……春未らば花は咲く、秋にけりば実がかかる。……唯それだけなのに、人生は複雑怪奇ヨリ召し喚ふのは過去の因いぢや未来の思ひに就かず現実を逃避し赤は赤、白は白、鳥も虫も出来ない色を自分でなく心で身に付かむを妄想のために外ならない。土を想ひますよ、現実に生きよ。眞実なるものは此の一瞬の現実に在る。どくに過去を慕ひ、未来を願うけはばも此の一瞬日々の現実によくはがてれど、という事実は動かず事は出来ばい。幸福を他に求めるな、過去にと未來にも、そこからにも求めるな。眞実の幸福はいつも自分の足下にある。されば、一瞬日々に己の生命を完全燃焼して働くがよい。青春を惜むな、時間を惜しめぬ……時間の空費こそ己の命の空費である。思ひ耽るな人生は氣合だ。一瞬の生は氣合である。何時も天地の大生命へ生かされて、る己の命へ感謝して、いつも満々たる気魄にあふれていひものである。

〔第三回 身延山学生行脚〕

創価學會折伏街頭布教

長野県中信地区一円に展開

はじめ仁

駿鷲峰會を主体とする身延山大學・高校の学生有志による行脚布教は、学生自体の燃費による。自発的意志により、昨年夏以来、休暇ごとに休暇を返上し、費用は一切自己負担、或は貯金し、或はアルベイトをして費用を枯渉し、日高白雲師を中心として、現地寺院・相信徒と共に、回を重ねる毎により大きな成果を上げて来た。

今、その跡を小りかえつて見ゆば――――――

第一回目は昨年夏休みが新金のすきだ七月十九日を期して日蓮大聖人身延入山・聖蹟を巡り、身延山から鎌倉へ、更に海上本門寺をへて東京都心まで陸破・道中大聖人の靈跡を調査し、或いは小田原・横浜の両市で、現地寺院檀信徒と共に街頭布教を展開。二の間の行程およそ八十里日程十日、参加者七名

（身延山布教部）

日高白雲師・石原行紀師

（身延山大学）

次田覚翁 宇藤俊雄

早坂本勝 井前本昌

（身延山高校）石川義治

第三回目は、本年冬休正月早々四日より大聖人遊學研鑽の靈地、比叡山横川の定業院をより出しこに京都・奈良・郡山そして長驅して福知山へと行脚し、特に奈良・郡山では普段日蓮宗寺僧禮信等の總力を結集して県下天寶有の街頭布教を展開。その日程萬曆七日、參加者二十名。

八身延山布教師

日高白雲師

八身延山大學

沢田賞家

藤森龍家

佐々木友亭

石禍隆

川島本良

宮下鎮嘉

吉田鳳泉

小林白峰

八身延山高校

石川義治

八立正大學

伊藤白鶴

人日蓮布教研修会三葉会と清水英雄(身延山大學出身)

入静岡県立正青会同会会代表

尾白寅照(身延山大學出身)

八京都蓮(八久一青年会代表)

三木透(高級生)

人慈良立正靈山公吉年計レ花房教(甲南大學)

岩脇敏明(中学生)

遠山仁(小学生)

人大阪市坂東貴代(美容師)

櫻木蓮子(奈良市立大学)

岩脇幸子(高級生)

そして第三回目の学生行脚布教として春休かゝ三月八日より、長野県中信地区一円に亘つて、創価学会折伏の街頭布教が展開されたのである。一因に中信地区とは信州長野県の中央地区のこと。日程五日、參加者二十五名

八身延山市教師

市教師長若田満良師、日高白雲師、石川義正郎、今村本勲師

八身延山大學

藤森觀象 藤塚義誠 小寺栄光 鶴沢晴天 米木忠衡 清野英昭 香田圓泉 金川宣之  
福山忠司 川本龍祥 佐々木友學 藤原成憲 和田吉弘 法華堂見栄 小林白峰  
八島延山高枝△  
西川義治 近藤至也 中島康榮 稲藤穂良  
八奈良宗立正雲山翁青年部代表△ 穂木蓮子

### 学会折伏布教体制

第三回長野県下の行脚布教事。本年正月京都  
來良才面に於ける行脚布教當時、既に新暦會に  
於て計画され、いた。之の布教区域が長野県  
中信地区ばかり、布教目的が創価學會折伏と決  
定したので、二月五日、理地務請早々に、  
地区寺院に手を講議要望による。

この要望に應じて、身延山では、學生主力に  
加え、岩瀬布教部長の出馬、布教軍の活動が  
決定。布教中配布する教葉と布教部の意  
による。  
「懇は多忙なる一善た勝つ事なし」  
2.「人間礼拜に徹する事と信仰実踐と極地  
である」



3.「だまさねるは、二枚が創価學會実能」  
4.「破却の千萬シ一万枚、  
シ一方枚が用意す」  
5.「正しい信仰とはこれがだ」という類似のナラ  
香島は再三協議重ね、又身延山で行脚奉始  
の学生は改めて學會折伏の研究を進めた。三月  
六日、奈良より穗木蓮子さんも立綱して来尺。

# 響鼓折伏の才一舌

三月八日は六老僧富士日興上人が七百十七年

崩御の寛永四年同月同日、生誕された日である。

奇しくもこの日を期して信濃大助市より學金折伏の方一聲は放たれ、中宿地区一門に亘る法難の火事は切々と燃え、

信州は雪が深い。寒氣を一しき體にしむ、大町市街は軒はがれに三尺余の雪となり、やがてあり、眼前にせり立つ北山山門の鐘峰は自がくく、鼻氣味が小股を立てゝいる。

それが三皆里合二流の玄題旗を押さえて、宋務所長坂下現地寺院、学生行脚奉隊をして檀徒の頃に延々長姫。隊伍を組み、地轉をゆるかし市井の草目心地を誓約せしめて東鼓が大行進は征く。

鐵琴街教所の街頭謡説は、謂葉する人道に埋まり、特にマイクは学金食の多くといわれていて市内や、地主幹部の内前にすりつけられ、思をつく向ひばく物販問合の大道を脚子吼し、決定的鉄錐を加之す。市中隈なく布教した後、妙心寺一住弘大橋玄

黙師一本堂にて、日高師の學金批評講演会が開かれたが、立舞の余地もがない懇親の中には地東僧侶の事も見受けられた。

練はて度談会は布教隊と妙心寺檀信徒とが、懇至度の胸襟を開いて、特に青年活動のあり方を討議し、盛り上の感動の中、夜十時閉会。十二時まで昨夜の旅行列車中一睡もしなかつて行脚學生は泥のように眠りに落ちた。

## 大糸造織機シラモツボシの布教

三月九日午前八時、豊科一乗寺(住取千野信和師)より若じ過ぎて火長大型貨物バスに乗り、大糸線にそつて、その日へ最終地東國多賀へ向う途中、いたずら所で布教する。小郡港ではバスを降りた所で謡法、や、大子町では街頭行進と謡法三曲を演す。まるでミラミツボシの布教である。布教但所では何處でも地理信徒が待機している。

岩盤、松川、池田、追分、有明と進け、櫛高の妙法寺一住弘甲込義康師で中食と供養食を多く、所で櫛高町内では二つ以上事があつた。

個によって学食地区幹部の門前にマイクを立てる。而後は、物語り、教名の学食企画公演として嘲笑もしくは、喜びの山一般峰會のものがタメタに引き、軽く身の動きをよだつようの大獅子吼を放つや、前評じが帝学祭行者が震て大の如く走る事、並んで地団座を踏む者、坐すて横帯テトロコーラーをね詠る舞者一はじめ大・忍・く學食本部へひし張るのやあろう。せへ西へ没入するかよ。

然しあれほん格好、半裸は何か度重の一つもアリやうなものばくに敏感を覺め震起すらない。午後にはなつて室模様が變り大雪が降りしきる。柏木町の布教をする、いよいよ豊科町へ入る頃、あたりは一面の銀世界。

町内の布教は教師、更にバスで田代、塙金塙も長駆し、豊科駅前へ停つてその日最後の街頭布教五而之五時は既に日はとどけりと暮れ、雪玉がぱつた木才の灯も淡い。

七時、一果寺祖家のしげの新司にして東野行

雪中ノ松本市街

その後、行脚先生は学金所伏開会の弁説藝術上  
精耕複討し合い就寝したのは夜半の二時三分。  
既に下雪注落聲が出來てゐる。

せい没筆するかよ。

午後にほりで空模様となり大雲がさざる。  
柏木町の布教をすませ、いよいよ豊科の所へ入  
る頃、あたりは一面の銀世界。  
町内の布教は教を折、更にバズで田代・橋金  
塙も長駆し、豊科駅前へ停つてその日最後の街  
頭布教玉而之辰時は既に日はとゞ少りと暮れ、  
駅至かばつ大木不との灯も淡い。

既に駿府太陽には、宗務所長内川海麿所、龍興寺内藤五勝郎、柳心寺大禱主覺師吉はじめ中臣地区寺院なら公に西教十名の信徒が機銃して倒り、午前十時を期して内川所長の第一声により終日市内十数ヶ所に及ぶ行脚布教の幕が切つて落すべし。

収容机をすし、降り来りの大雪は網代屋を望くし思案の夜をぬうす。地下タバコ水がだしつと

はつて足先は既に感電を失い、さがから冰の中  
を歩き、氷の中にたたずむに似て、タイコを持  
つ手も早やかじゆくである。

然しそうであればある程靈廟の法音は薦々海  
をと天地をゆるがし、折伏説法の機峰はいよい  
よ白熱していく。

布教隊に續く現地寺院の最年少者は十三才、  
奈良から駆せ参じた榎本蓮子さんも因性に負け  
いと赤い火を小さく。

泉務所内東寺で中食、龍興寺で中憩した外、  
冷之助の衣体を温める體もばく、市中限らず不  
自惜身命の布教を展開してゆけば、感動の事ま  
り思わず嘆賞する市民の聲も見らる。

自詠自ら四く走り雪化粧した榎本誠のそばを  
立てば、手へ入ったのは日ひも暮れなくすと一刻  
五時を経る。

すしもかき本堂は僧侶にあらぬ、終日雪中で掌  
会所の布教をして来つて甚矣其間外にこゑり、  
二百余丁の裏顔は文字通り本堂をかるがすほか  
り。

御前前に結成報告を行ひ、つづいて安立寺住  
私藤森師の結成経過報告、岩田布教師長、内川  
宗務所長へ旅詳、青年会正代表として藤森觀象  
君の答辞あつて祝禮被當。

祝禮は京都時命布教師三不淨蓮師なら公派同師  
の主宰する通商年会、奈良東務所長太島鳳  
靜師並に同師の主宰する奈良県下日蓮宗立正青  
年会連盟、奈良立正青年会、等等より寄付金數十  
通。悉く正月開西行脚の法縁に通ふもので、  
ある。

統一して香院にて夜二時迄座談会。各寺院所  
長より香院代表より活潑な意見が交換され、青  
年の道念はいよいよ熾烈に燃え上つていつだ。  
此の復行脚隊は実功へゞそ浅間の早立平賀代  
の手の湯に今宵長留て一泊、就寝は半十一時

## 立正三月年会の終了式

直ちに六時より和立井本堂にて長野原中傳  
地主立正青年会並に宇立井立正青年会の無式  
中信地主寺院住職、身延山布教隊領座して、

## 浅間と駒ヶ根に

三月十一日、早朝八時より浅間町内三十所で  
学年折伏布教、これは学年和浅間の県体育館  
に於て大会を開いた社会的影響に対する特に  
行われたもの。

九時三十分松本駅頭、内川音長はじめ地区井  
院道信徳の轍敷に見送られ、長野と伊那の駒  
ヶ根市へ向う。

駒ヶ根は行脚学生藤原義誠君の自作大法寺の  
ある所。十一時三十分駆けつけば大法寺藤原義  
誠君とはじめ數十名の信徒が駆け出直ち  
に街頭布教。午後一時三十分布教を終りて見  
れは、八日、初日以来さしも一枚枚の教葉が、  
二万枚のカラシ色紙に一枚残らず駒ヶ根市へ尽して  
いた。

### △附記△

一、この記事中前回の都合上、あせ詰になつた方  
々の席草名を漏らしていふ事をお詫び致します。

二、中信地区寺院より金二才円、その他多くの方  
より御供養金を多くし、厚く御礼申上ます。  
三、次回の布教は「駒ヶ根峰」資金、からだに次回

行脚の基金とさせて頂きます。  
四、次回の行脚布教は夏七月新金直後、名古屋、  
京都、大阪、奈良と予定しております。

# 創価学会折伏衝頭布教

## 火の反

郷音

### ある學會員の改心

引た様さねってくまつた。

この度、長野県下に於ける創価學會折伏衝頭布教によつて、即日改心した一人の學會員があつた。それは三月十九日の事である。

Aさんへこの人に評する學會側の後藤をさしてめる爲、特に姓名、性別、住所、學令を教えたが、かねて創価學會の熱烈な信者であつた。

そして次々に人々を入会せしめては、その家の先祖の位牌も神棚も焼き払つて、Aさんの親族の中に不幸だそ大正三年八月、Aさんの親族の中に不幸があつた。遺族、親族の者は集つて、しめやか前田通穂を嘗んだ。この時Aさんは、あ通穂の身上、人ごとば尊んでの時Aさんは、あ通穂の身上、人ごとば尊んで創価學會へ入信をす、め、

「唐衣れば布利茲がある。信らばけ東洋御がお在まし」として通にはその家の神棚も神様のあれど、強

余りの事に遺稿も親族も「非常識かる」と非難した。然しあさんは學會に教え込めてメタ數字を小り回し、批難も法難も思つて、もしろ欣然と引き取つていた。

折伏が翌日九日、あ葬式の準備をしていた午前十時頃のこと、家近くで創価學會の迷亭を破拆工として身延山学生行脚部が教説の獅子吼や、マイクを運してイーイーとして聞えて来た。弔言は次の如くであつた。

「創価學會は、悉く先祖の位牌を焼き払つて、然し位牌とは单なる木の切れぼしではない。

先祖の靈の宿る以上、先祖の体そのものがある。其の首牌を焼くとは、我が父母也、先

相の体に火をつけて、頭こ下に轟き殺す事に等しい。また親を生き残す、火葬場の釜の中に入れて火焼く、董油をかけて頭を轟き殺す事と並んでする。

曾つてナゲズドイツはガニ次世界大戦中、パリニードのアイシナヒソツに於て、数百万のユダヤ人在が火葬場に火焼き殺された。

人類史上、或ノアモスキトイの残酷な行為である。

創価学会は現在全国に三百万会員を持つといふ。そタ一世帯に平均五つゝ位牌があるとするならば、創価学会は位牌を焼く事によ、五千五百万の父母・先祖の体を火葬場に虐殺した事になる。まさしくナゲズドイツのユダヤ人に計すよりも残酷の度は甚しい。

殺人罪の中でも父母・因親を殺す大罪とされど罪の深いものはないとされてゐる。ほろほろ法律上では、先祖の位牌を焼いても裁判問題とはならないかも知れない。然し信仰の上からいえど、女の罪は尊族殺しにも等しい。

因果報讐の真理より是れは、先祖の靈とその体である位牌を火葬場に焼き捨てるものは、ま

だ因縁の子孫によつて我れと我が身を生焼すに燃す殺されるであろう。創価会三百万の其帝は自らの薰火によつて焼き殺かれ、ニニバ大火所燒り炎は実現する。

ナゲズドイツは自らの業火によつて死んだ。そしてユダヤ虐殺の歴史の中に新生西ドイツの復興があつた。然しどイツ人は地上に生き残った以上、或う革の出来ない二点や虐殺の歴史を繼承してゆかねばならぬ。

現在創価学会は、先祖の位牌を焼く事がせず作戦と執行して焼く事は止めている。然しそれを寒かつた上反省せざらず、歴史もせざらずモロコシく又東に政治へ進出を試みていろ。何といふ恐しい事であつた。これが信仰する者を態度であつたが。

やがて創価学会はナゲズドイツを始く崩壊していくのである。然し、たゞ之の組織は崩壊してても、曾て学会員であった者は、地球上だれにかつても生ける限りは、先祖を焼き殺す大罪とされど罪を懲らしむが物を知らない。如何に懲らしめて鐵棒し切ればい罪を犯したの

この町内には創価学会の者はけりかいか。先祖

を嫌す私つた者はいはが、あれは出て来い！  
そしてここに懲悔せよ！

だとい常会員でなくとも、毎日あなたがお茶  
を飲むよろに先祖にお水をやめてはるか。毎  
日あなたの部屋を掃除するよろに先祖をきめ  
にしてはるか。毎日あなたの部屋に電気をつけ  
る様に先祖にあらわせているか。毎日あなた  
が顔を洗う美しい着物を着ている様に先祖の

位牌につもる不吉利をねづかへるか。

町内の皆さん今すぐ各自の先祖をけりらん  
下さい。そして自分の事よりも安否先祖を大切  
にしなさい。  
先祖にぬか手けノ先祖は根、手孫は枝葉。  
根が枯るれば枝葉も枯れる。根深ければ枝  
葉も深遠ければ流水長しといふのはこのこ  
とであろ？

Aさんは、この話を聞く前非を悔ひ正。そ  
して家を駆け出しだ。下駄をばくのも、おじ  
かしく夕ひ八九三で庭を走つた。門前をまわ  
りてころんだ。さ水でも駆けて布教隊の手ぼへ

来た。

そこには二流の玄団期を押し立て、闇業の成  
にアサの袈裟表半甲、脚絆に細打笠、山47太  
鼓をかゝえた二十数名の身懸け育母僧が神々し  
いばかり整然として居並んでいた。

Aさんは土下座した。兩眼からは  
とめどもなく涙が顎をつたまつた。それは輝く  
懲悔の涙であり、はじめて合掌の出来た正法  
帰依の法燈の涙であつた。

やがて不敬隊は、雲鼓の法音を高らかに次  
布教地へと立ち去つていつた。Aさんは居ても  
立つてもあらぬ下、家に帰らず還徒親族の一  
同に深く仰が、葬式の済むや直ちに小えに東リ  
遠路しかも吹雪の中をもとめず、その日布教  
隊の宿泊する雪舟の裏弄へ來つた。

夜八時よりの一時間に亘る講話を聞き、次に  
お座談会となるや、Aさんは發言を求めて前非  
を悔い、今日を限りに創価学会を脱会し、身延  
山を中心とする日蓮宗の信仰を取る事を誓つた。  
座谈会は大いなる感動によめへた。その  
感動の直後、尼姑が人々の心中に深い内觀の渙  
か、静かに挂かつて行、大・座談会は、これ

本会館一念の中にあらざる想ふやくくす

Aさん

「タジヘタシで走つた事も、道で二三人で二三  
人を氣きさせんがしたるそーと布教隊の方々の  
姿を見た時、二ねこと求めに求めるひだり蓮大  
聖人様の慈悲のようでした」

（オワリ）

松本行脚布教以来、就職峰会の為に絶大なる  
御支援を賜りますてありがとうございます。  
まあ御供養金を戴きましに事、紙面上で厚く  
御礼申上ます。  
これらの净財は就職峰会資金がうべに次回行  
脚活動の基金とさせて戴きます。

合掌

## 就職峰会第一回ウバワスタ 講義テキストより

○過ぎにし事を悲します、未らぬ事ハあこ  
がれず、現在ある事に身をもつてせば、その  
顔色は朗かなり（へ相應部、革品）

○一日の光陰は、少くとも多くとも、これを空  
くする事なれば、一枚をすつれば、これは  
これ次の生命を滅するなり（最老尼傳）

○身の毒は、取越苦勞と過去の愚痴、誠を  
尽して今日を榮めし人師尊優婆夷（

# 編集後記

- 愈々六月、入梅の候となりました。  
 井刊二号以来而無沙汰致してありましたが、こゝに三号がさきよりましたのでお送り致します。
- 今日は趣向を變えまして、長野県中信地方行脚叢書に重店をおいて、その経過をよりよく見ましや。
- 皆様に親しくてあ読み頂ける様にと努力致しましたが、何介にも不十分な點にこのようでは三号以上とどまりました。
- 内容、その他についての質問、而批判を仰ぎたく思ひます。  
 本誌は私達の体験誌です。 お恵に大切にし可愛がつてお書き下さったものです。  
 今後、而協力を願つてやせませく。

就鳥峰 手稿 3号

昭和三十八年五月二十五日發行

編集・印刷・發行 就鳥峰  
山梨県南巨摩郡身延町久遠寺